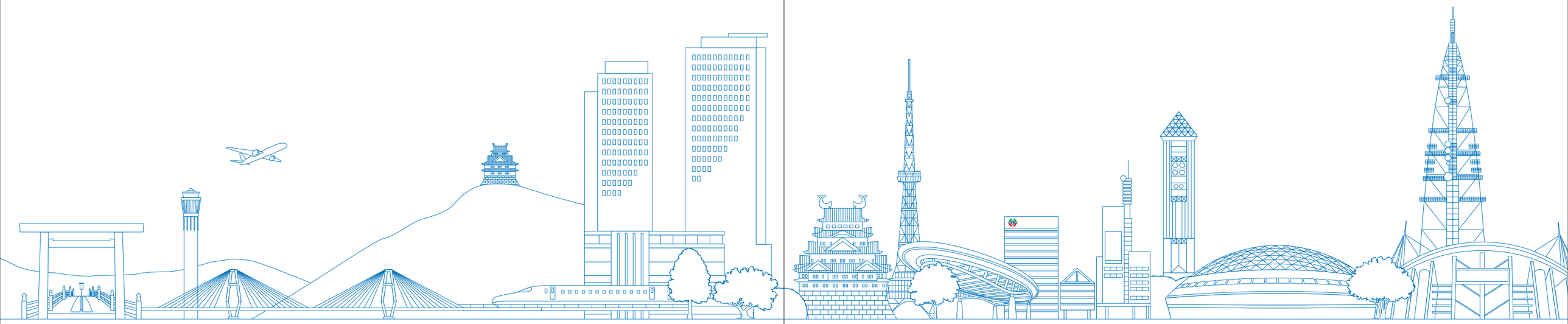
東海テレビ

東海テレビ
この1年の取り組み
2014



東海テレビ放送株式会社

はじめに

東海テレビ放送株式会社
代表取締役社長
内田　優

本冊子は2013年7月から1年にわたり、放送倫理意識の向上、岩手をはじめとする東北支援、放送事業を通じた社会貢献など、弊社で実施してきた取り組みについて、皆様にご報告するため作成いたしました。2012年から毎年1回発行しております本冊子ですが、3冊目となる今回は、タイトルをこれまでの「再生の取り組みのご報告」から「東海テレビこの1年の取り組み」とさせていただきました。しかしながら、2011年8月4日の「ぴーかんテレビ不適切テロップ問題」（ぴーかん問題）という重大な過ちを風化させない決意に変わりはございません。「再生」の志は失うことなく、これからも信頼回復に取り組んでまいります。

ぴーかん問題を機に、再発防止策の提言と再生に向けた取り組みのチェックを目的に立ち上げた「再生委員会」が昨年8月、約2年にわたる活動を終了し、第三者機関「オンブズ東海」に機能移管しました。一方社内では、新たに各部長で組織する「コンプライアンス責任者会議」を立ち上げ、放送倫理やコンプライアンス面での社内チェック、情報共有を図っております。

放送倫理をめぐっては、外部講師を招いた全社研修会や、各部署が独自で企画した勉強会を継続的に開催しております。参加者一人ひとりが研修会や勉強会で問題点をしっかり理解し、吸収することが最も肝要です。誰もが当事者意識を持つことで、会社全体に倫理観が醸成できるよう、今後も実効性のある取り組みを推し進めてまいります。これにより、従業員誰もがジャーナリストでありマスコミ人であることを肝に銘じ、テレビの公共性を自覚し行動すれば、必ずや皆様の信頼を回復できるものと信じております。

また、テレビの番組作りはコミュニケーションなくては成立し得ません。不測の事態を防ぐためには、従業員同士や協力会社のスタッフとともに十分に情報共有し、問題があれば早急に解決することが不可欠です。社内外一体となって、より風通しの良いコミュニケーションが実現できる体制を整えていきます。

地上波テレビを取り巻く環境は激変しており、携帯端末さえあれば、いつでもどこでも情報を入手できるようになりました。これによりテレビ離れが急速に進んでいくという予測もありますが、だからこそ、地上波ローカル局は地域との関係が一層大事になると思います。「地元の話題をとりあげ、地元の皆様から支持される」これが地上波ローカル局の存在意義と言えます。そういった意味では、「地元の魅力発掘と視聴者への還元」も重要な役割のひとつです。昨年4月にスタートした平日午前の情報番組「スイッチ！」に加え、「視聴者参加型生クイズお茶の間アンサー！」「祭人魂」「黄金鯱伝説グランスピアー」という地元密着型の3番組を新たにスタートさせました。この地方にしっかり根付くよう、視聴者の皆様とともに育てていければと思っております。

弊社は昨年、開局55周年を迎えることができました。これもひとえに視聴者はじめ関係者の皆様の支えがあってのことと改めて御礼申し上げます。これからも放送の公共性・公益性を自覚するとともに、正確かつ有益な情報をいち早く発信し、第12次経営計画のビジョンとして掲げた「愛され、信頼される地域最良のテレビ局」の実現を全社で目指してまいります。

視聴者はじめ関係者の皆様には、今後も弊社の活動に対し、なお一層のご支援、叱咤激励をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

＜ビジョン＞　愛され、信頼される地域最良のテレビ局

＜基本理念＞

1. 放送の持つ公共性、公益性を自覚し、社会的使命感と高い倫理観を持って職務を遂行する
1. 表現の自由を守り、正確で迅速な報道を通じて視聴者の知る権利にこたえる
1. 良質な番組、イベントを制作し、市民生活に役立つ情報と健全な娯楽を提供、地域文化の向上、福祉の増進に努める
1. ライフラインとしての使命を自覚し、地域の安全・安心に寄与する
1. 放送局として自主・自立を守るため経営の安定を図る

＜基本方針＞

1. コンプライアンスの推進と放送倫理教育を徹底し、視聴者の信頼回復に努める
1. 人は財産の視点に立ち、放送人としての人材育成を進める
1. 安全な番組制作体制を確立する
1. 地域の放送局として自社制作番組の充実に努める
1. 東海テレビ、グループ会社、協力会社スタッフのコミュニケーションを密にし、活力ある職場作りに努める
1. 震災被災地への支援を継続する

目　　次

P01　はじめに
P03　1. コンプライアンス・放送倫理意識の醸成を目指した新体制
P05　2. 研修会・勉強会・コミュニケーション活性化
P09　3. 第三者意見Ⅰ
P10　4. 被災地支援の取り組み
P13　5. 地域に根差した取り組み
P17　6. 開局55周年に関する取り組み
P20　7. 環境に対する取り組み
P21　8. 第三者意見Ⅱ
P22　おわりに

コンプライアンス・放送倫理意識の醸成を目指した新体制

2011年8月の「ぴーかん問題」からの立て直しを図るため、東海テレビはさまざまな改革を推進してきました。
その主な原動力が、問題直後に発足した「再生委員会」でした。
委員会は20回の全体会合を経て、「再生に向けた一定の役割を果たした」と判断し、
2013年8月、約2年にわたる活動を終了しました。
これを受け、東海テレビは、新たに「コンプライアンス責任者会議」を作り、
既存の社内組織「コンプライアンス委員会」、そして第三者機関の「オンブズ東海」が連携し、
社内外から会社の取り組みをチェックする体制を構築しました。

主な取り組み

1 「再生委員会」の活動終了

「ぴーかん問題」を機に、東海テレビは上智大学新聞学科教授の音好宏氏を委員長とする「再生委員会」を設置しました。再生委員会は2011年11月、東海テレビに対し、問題の再発防止策や経営のあり方など具体的提言を盛り込んだ答申書を提出、その後は提言に基づく取り組みが適正に実施されているか、定期的にチェックしてきました。問題から約2年がたった2013年8月、再生委員会は東海テレビに「委員長総括」を提出し、活動を終了しました。

再生委員会「委員長総括」の提出（2013年8月28日）

「再生委員会」活動終了のご報告

2011年8月4日の「ぴーかんテレビ不適切テロップ問題」を受け発足した東海テレビ放送再生委員会は、同問題の再発防止策を検討するとともに、「放送倫理の徹底と放送人教育」、「コミュニケーションの活性化」、「コンプライアンス体制の充実」など、再生に向けた提言を盛り込んだ「答申書」に基づき、東海テレビの取り組みをチェックしてきました。
2013年8月21日に開催された第20回委員会では、「答申に基づく取り組みは一定程度進んでおり、『東海テレビの再生の道筋をつける』という委員会の役割は果たすことができた」として、8月末での委員会の活動終了と解散が決議されました。これを受け8月28日、東海テレビに「再生委員会委員長総括」を提出しました。

また「再生委員会が役割を終え解散した後は、オンブズ東海に全面的にチェック機能を移管する」とする答申書の提言に基づき、同日、再生委員会とオンブズ東海との間で業務の引き継ぎを行いました。同時にオンブズ東海には、今後もより一層、東海テレビの取り組みを冷静に、そして厳しく見守っていただくようお願い申し上げました。
2011年8月31日に発足した再生委員会は活動期間2年、委員会の開催回数20回で区切りをつけることになりました。今後は東海テレビの全ての関係者が、再生委員会の考え方を受け継ぎ、当事者意識を持って仕事に取り組んでもらいたいと思います。

2013年8月31日
東海テレビ放送再生委員会　委員長 音 好宏

コンプライアンス責任者会議

オンブズ東海

2 「コンプライアンス責任者会議」の発足

東海テレビでは、「再生委員会」の終了を受け、2013年秋、「コンプライアンス責任者会議」を新たに発足させました。「公正で誠実な放送活動を通じ、社会の期待と信頼に応えること」などを目的に作られたこの会議には、「コンプライアンス責任者」の役割も担う各部署の所属長が集まります。会議では、法令違反・放送倫理に関する情報、またトラブル案件やヒヤリ・ハット事例などを積極的に共有しています。会議は原則年4回開催しますが、コンプライアンスや放送倫理上の問題事例が発生した場合は、会議を緊急招集し、原因究明や再発防止策を検討することにしています。この会議で議論された内容は、社内の役員と局長クラスからなる上部組織「コンプライアンス委員会」と、東海テレビの番組やイベントをチェックする第三者機関「オンブズ東海」に報告する仕組みになっています。
コンプライアンス責任者会議は昨年11月と今年2月、5月に開催しました。各部署の「失敗談」を含め、幅広いテーマについて議論することで、会社全体の注意喚起につながるようにしていきます。

3 「オンブズ東海」2期目

2012年1月に設置した「オンブズ東海」は、昨年末1期2年の任期が終了し、今年1月から2期目に入りました。オンブズ東海の定例委員会は年4回開催されており、「コンプライアンス責任者会議」からの報告などをもとに、番組やイベントに関するさまざまな取り組みをチェックしていただいています。またこの1年は委員の皆さんに社内視察や、各種研修会に出席してもらうなど、東海テレビの取り組みに積極的に参画いただきました。

オンブズ東海委員

委員長
神尾　隆 氏
公益財団法人名古屋国際センター評議員

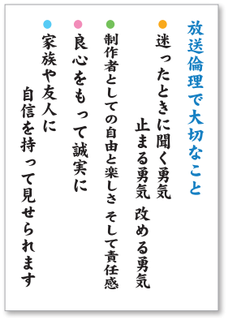
委員
河村 雅隆 氏
名古屋大学大学院
メディアプロフェッショナルコース教授

委員
橋本 修三 氏
弁護士

研修会・勉強会・コミュニケーション活性化

2

1 2013年8月4日 放送倫理を考える日



東海テレビでは、ぴーかん問題を起こした8月4日を「放送倫理を考える日」と定めています。「考える日」を迎えるにあたり、7月の1か月間を例年通り「放送倫理を考える月間」として、社内各部署で勉強会や部会を開催する機会としました。また、「放送倫理で大切なこと」を標語にしたポスターを新たに作成、社内各所に掲示し、全社的な放送倫理意識の醸成と浸透に努めました。

そして8月1日には全社集会を開催しました。集会には東海テレビの役員・従業員のほか、協力会社のスタッフなど、合わせて339人が参加しました。集会では内田社長が「ぴーかん問題から2年がたつが、視聴者の皆さんをはじめ、社会の信頼はまだ回復されたというわけではない。集会では各部局の報告が行われるが、ぜひ有意義な時間にしていきたい」と述べました。続いて制作現場や編成、営業、事業開発など、10部署の若手管理職らが、7月の放送倫理を考える月間で実施した勉強会や、番組制作・放送体制の点検結果などについて報告。参加者全員で情報を共有し、再発防止の誓いを新たにしました。当日、参加者に対して実施したアンケートでは「続けることが大事」「年に1回、従業員、協力会社の人たちが同じ場所に集まり、立ちどまって、放送倫理について考えることの大切さ、意義を改めて感じることができた」などの意見がありました。

放送倫理を考える集会

また、東海テレビの1年間の取り組みをまとめた冊子「再生の取り組みのご報告2013」を発行、役員・従業員をはじめ関係先にも配布したほか、同じ内容を8月4日にホームページにも公開しました。

全社集会の模様は8月25日午前6時15分から放送の視聴者対応番組「メッセージ1」でも報告しました。

これからも当時のことを風化させることなく、また東海テレビに関わる一人ひとりが倫理観を見つめ直す場として、この行事は継続していきます。

2 研修会・勉強会の実施

この1年も、東海テレビ役員・従業員、協力会社スタッフを対象にした全社的な研修会、そして部署ごとの取り組みを実施しましたので、ご報告します。

放送倫理研修会（2013年12月5日開催）

東海テレビが毎年開催する「放送倫理研修会」では、NHKと民放各社でつくる第三者機関・BPO（放送倫理・番組向上機構）から講師を招き、直近でBPOが取り上げた放送倫理違反事例などをもとに、問題の背景や再発防止策など、注意すべき点について解説いただく場としています。

2013年12月5日に開かれた研修会では、放送倫理検証委員会委員長代行の水島久光氏（東海大学教授）と村上徳調査役を講師に迎え、東海テレビの役員・従業員、協力会社スタッフなど合わせて251人が参加しました。

水島氏には「放送倫理と組織の力」というテーマで、組織の中での情報共有の大切さや、放送に携わる上での意識の持ち方について、講演いただきました。講演では、2013年7月に行われた参議院選挙における、立候補予定者の取り扱いに関する問題事例が紹介され、水島氏は「報道部門だけでなく、制作部門や直接番組制作に関わらないスタッフでも、関連情報に注意を払い業務にあたることが必要」と訴えました。

放送人研修会（2014年3月13日開催）

テレビに携わる者として知っておくべきことについて、外部の識者・専門家に講演してもらう「放送人研修会」を2014年3月13日に開催しました。3回目の研修会には、ドキュメンタリストで法政大学教授の水島宏明氏を講師に招き、「現場の劣化を防げ！～外から見たテレビの今～」というテーマで講演していただきました。「想像力を働かそう」「すべての人はジャーナリスト」…生活保護受給者やネットカフェ難民など、弱者に寄り添う取材をライフワークにしてきた水島先生のメッセージには、長年の取材経験に裏打ちされた「現場の人」ならではの説得力がありました。講演会は制作系・報道系の事例に分けて、1日に2回開催し、延べ254人が参加しました。

第3回放送人研修会

水島 宏明氏

ジャーナリスト。法政大学社会学部教授。北海道出身。札幌テレビと日本テレビでドキュメンタリー番組の制作に携わる。2007年放送のドキュメンタリー番組『ネットカフェ難民～漂流する貧困者たち～』で同年度の文化庁芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

第3回放送人研修会で講師をお願いした水島宏明氏にご意見をいただきました。

制作者だった私にとって疑問だったのが、なぜ「あの東海テレビ」で不祥事が続いたのかだった。「あの東海テレビ」というのは、表面的なニュースにとどまらず、その裏の真実や人間や社会の奥底を見つめる番組制作を重ねる全国屈指の局という意味だ。

「ぴーかんテレビ」問題などの不祥事の根を絶つには結局は「ジャーナリストとしての姿勢」や「取材相手や視聴者への想像力」を育てることしかない。研修会では、その頃話題になっていた児童養護施設の子どもたちを扱った他局ドラマによるフラッシュバックの問題、つまりテレビが持つ弱者への加害性も合わせて俎上に載せた。そういった弱者への配慮では制作も報道も変わりはなく、広い意味でのジャーナリズム、「社会の今を取材し伝える」という機能として、実態を念入りに調査した上で放送の影響も考えることが肝心だ。だからこそ報道以外でもテレビ制作にかかわる者は「ジャーナリスト」としての自意識を持つ必要がある。テロップの作成者にいたるまで、と問題提起したつもりだった。

研修会での反応をみる限り、私のメッセージが届いたかどうかは分からない。だが、研修会の「熱」が終了後の職場でも続き、賛同の他に「水島氏にテレビへの愛はあるのか」といった反発などで紛糾しワンワン議論の声が響いたと聞いた。現場の人たちが考える何らかのきっかけや刺激になったのなら、制作者OBとして本望だ。

大事なことは、番組がナマモノであるのと同様、報道・制作集団である組織自体もナマモノだということだ。日々、新たな取材対象を相手にするなかで議論し、確認する作業を繰り返さないと、とたんに退行してしまう。恐れるべきは現場から「熱」がなくなることだろう。議論せず、仕事が「作業」になることだ。熱のない集団は“ものつくり”の集団ではない。幸い東海テレビの現場には今も激しいほどの「熱」がある。熱く語り合い、上から目線の外部の声を押し返し、大胆かつ細心に、これぞジャーナリズムという新たな形を示し続けてほしい。

各部門の取り組み

社内におけるコンプライアンス・放送倫理意識の醸成については、「誰もがみな放送人」という考えのもと、各部門でそれぞれの業務に応じた取り組みを実施しています。

ニュース番組を主管する報道部門では毎日、朝は取材に関する事前打ち合わせ、夕方ニュースの放送終了後には番組内容に関する反省会を開いています。取材で判断に迷ったケースやヒヤリ・ハット事例などを報告し合い、その後の適切な取材活動に役立てるようにしています。

情報番組やバラエティ番組などを主管する制作部門では、毎月1回「放送人勉強会」を開いています。プロデューサー、ディレクター、アシスタントディレクターなど、職種や年齢層別に少人数のグループに分かれ、番組制作上の疑問や課題を話し合い、番組制作力や組織力の強化に努めています。

イベントの企画・運営などを主管する事業部門では、隔週で開催する部会で、「失敗を教訓に」という考えのもと、問題事案を積極的に出し合い、再発防止に努めているほか、イベントの安全・安心な開催をめざし、防災計画の点検を適宜行っています。

営業部門では、取引先に迷惑がかからないよう、作業漏れや連絡ミスの有無をあらかじめ複数人で確認するようにしているほか、業務上の問題点について話し合い、事前に解決できるようにしています。また、営業部門は、インフォマーシャルや番組内でのパブリシティの制作、さらにはスポンサーと共同で実施するキャンペーンやイベントなども担当しており、社内外の連携に不備がないかなど、確認を欠かさないようにしています。

技術部門では、すべての生放送番組で、システムトラブルへの対応やミスを確認するために、映像・音声担当者にバックアップ要員を配置しています。また生放送番組終了後には技術・美術・照明・演出スタッフなどが反省会を開き、次の放送に生かすとともに、スタッフ間のコミュニケーションを活性化しています。

編成部門では、番組制作に関する法律・法令などの情報収集、若手スタッフに対する著作権講習、新聞のラジオテレビ欄や番組解説など広告の誤表示を防ぐため、複数の目でチェックを行っています。

コンプライアンス部門では、BPO発行の報告書やメールマガジンの配信、コンプライアンスや放送倫理に関する話題をまとめた社内報、視聴者の皆さんから届いた意見をまとめたレポートなどを全社に配信し、閲覧できるようにしています。

コミュニケーション活性化の取り組み

「現場スタッフ同士、顔も名前もわからない希薄な関係、風通しの悪さ」。過去に問題を起こした時、社内で聞かれた意見です。東海テレビでは、社内外関係者のコミュニケーションの活性化を図る一環として、CS（カルチャー&スポーツ）活動を実施し、東海テレビ従業員および協力会社スタッフが気軽に参加できるイベントを企画しています。2013年度は、11月に「ボウリング大会」を開催、番組制作で忙しい部署の関係者も含め、28組84人が参加しました。普段は面識がない部署の人たちが隣り合わせのレーンで顔見知りになるなど、大いに盛り上がりました。また3月には社内のスタジオを使って「年度末懇親会」を初めて開きました。部局や世代、そして会社の壁を越え、業務だけでなく、さまざまな話題に花が咲き、有意義な時間となりました。

この１年の主な取り組み（2013年7月～）

2013年

7月	放送倫理を考える月間
8月 1日	放送倫理を考える集会
8月 4日	放送倫理を考える日
8月 7日	内田優社長がＪＡ岩手県中央会・岩手県庁・岩手めんこいテレビを訪問し、1年間の取り組みを報告
8月21日	第20回再生委員会
8月28日	再生委員会　東海テレビに「委員長総括」提出 再生委員会とオンブズ東海との業務引き継ぎ
8月31日	再生委員会活動終了
9月 3日	「オンブズ東海」第7回委員会
10月 8日	「コンプライアンス責任者会議」発足
10月15日	「スイッチ！」スタッフを対象とした個人情報の取扱いに関する講習会
10月16日	クロスメディア開発部　HP・WEBアプリのセキュリティ対策自主勉強
11月11日	55周年記念式典（東海テレビ本社Bスタジオ）
11月25日	「コンプライアンス責任者会議」第1回会議
12月 3日	「オンブズ東海」第8回委員会
12月 5日	放送倫理研修会「放送倫理と組織の力」 （講師：BPO放送倫理検証委員会委員長代行　水島久光氏、調査役 村上徳氏）

2014年

2月18日	「コンプライアンス責任者会議」第２回会議
3月 4日	「オンブズ東海」第9回委員会
3月13日	第三回放送人研修会　「現場の劣化を防げ！～外から見たテレビの今～」 （講師：ジャーナリスト・法政大学社会学部教授 水島宏明氏）
5月21日	制作局講演会「よ～いドン！」視聴率10%の秘策と制作現場の舞台裏 （講師：関西テレビ「よ～いドン！」チーフプロデューサー　堀切八郎氏）
5月19日	「コンプライアンス責任者会議」第3回会議
6月 3日	「オンブズ東海」第10回委員会

第三者意見 I

3

2013年8月まで再生委員会委員長を務め、現在は社外アドバイザーを務める音好宏氏に、
東海テレビのこの1年の取り組みについてご意見をいただきました。

2013年8月、再生委員会は20回目の会合を開き、委員会が掲げた東海テレビの再生に向けた取り組みの諸項目が、一定の成果を上げつつあるとともに、放送倫理向上への取り組みが定着しつつあるとして、委員会の目的がほぼ達成したことを確認しました。その上で、2年間にわたる活動を踏まえ、東海テレビに「委員長総括」を提出。放送倫理向上に関するさまざまな取り組みの進捗を確認する作業はオンブズ東海に引き継ぎました。

周知の通り、2011年8月に東海テレビで起こった「ぴーかんテレビ不適切テロップ問題」は、東海テレビのみならず、日本の放送全体の信頼を揺るがすものでした。この問題の原因究明と再発防止策を検討した東海テレビ検証委員会は、問題発生から約1か月後に報告書を発表。この報告書を受け、具体的な再発防止策を策定し、その実施状況を確認する再生委員会を設置し、私はその取りまとめ役を仰せつかったわけです。

再生委員会の作業を振り返ってみますと、私は委員長として、全体の議論の方向性や作業の進め方についてリードすることはありましたが、放送倫理の向上や放送現場の活性化に向けた個々の取り組みについては、東海テレビの各部局から集まってくれた委員の皆さんが議論し、意見集約するなかで取りまとめたものです。もちろん、それらの議論を行うにあたっての基礎的な資料となったのは、アンケートやヒヤリングなどで集められた現場からの意見や要望でした。改めて申し上げたいのは、再生委員会が示した放送倫理の向上に関する具体的な取り組みは、東海テレビの「現場」から生成されたものであるということです。

昨夏の再生委員会解散後、その役割を引き継いだオンブズ東海は、それまで以上に現場の声に耳を傾け、現場とのキャッチボールを図ってくださっていると聞いています。他方で私は、委員長退任後、社外アドバイザーとして、東海テレビの活動について定期的に報告をいただくと共に、社内の研修会などにも顔を出させていただいています。それらを見聞きするなかで感ずるのは、ぴーかん問題の教訓から生み出された仕組みは機能しているということです。

しかし、人間は忘れる生き物でもあります。

ぴーかん問題が起こったとき、東海テレビに関わっている人たちが受け止めることになった社会からの厳しい批判や侮蔑の眼差しも、時間とともに、遠い記憶になることは避けられません。もちろん、あの後に東海テレビの仕事に就いたスタッフも増えてきています。また、経営メンバーも、この間に変化がありました。

ぴーかん問題が起こってから3年。いまの放送に対する視聴者からの視線は、あの当時以上に厳しいものがあります。東海テレビが、あの教訓をどのように生かし続けていけるのか。東海テレビに関わる一人ひとりに、かかっているのです。

音　好宏氏

上智大学文学部新聞学科教授
北海道札幌市生まれ。1990年上智大学大学院文学研究科新聞学専攻博士課程修了。日本民間放送連盟研究所勤務後、1994年より上智大学専任講師、その後、助教授を経て現職。専門はメディア論。

被災地支援の取り組み

4

東海テレビでは、放送やイベントを通じ、岩手県をはじめとする東北地方の被災地の支援を行っています。
この1年も情報・報道番組で被災地の現状や、復興の様子を紹介したほか、
自社イベントでは現地の特産物の販売と観光PRを行いました。

x Music
（クロスミュージック）

「奇跡のピアノ」
（2014年3月5日 放送）

制作部　高村　幹

「日常」と「音楽」を掛け合わせた企画を通じ、音楽とアーティストの魅力を発信する音楽番組「xMusic」では3月5日、岩手県宮古市の小学校で開かれたミニライブを放送しました。

番組の主役は、1台のオーストリア製のピアノ「ベーゼンドルファー」です。宮古市内のジャズバーにあったこのピアノは、その独特の音色で訪れる人たちを魅了していましたが、3.11の津波に飲みこまれ、音を失うことになります。一方、「99%再生は不可能」といわれたこのピアノの修復に情熱を傾けたのが、ジャズバーのオーナー・堀内繁喜さんでした。「ピアノを買うならベーゼンドルファーだ」…かつて心酔した地元ジャズピアニストのこのひと言で購入を決めたというピアノの音を何としても取り戻したい。自宅もお店も津波で失った堀内さんでしたが、執念が実り、ピアノは奇跡的に再生したのです。

そして宮古市内の小学校で開かれた一夜限りのミニライブ。「xMusic」出演のアーティスト・TEEさんの歌声とともに、会場を優しく包み込むピアノの音色が印象的でした。

スイッチ!
「いわて復興応援バスツアー」
（2014年3月11日放送）

アナウンス部　長島 弘樹

「スイッチ !」では東海地方からでも復興に協力できる方法として、岩手県と県下のバス会社が連携して行っている「いわて復興応援バスツアー」を紹介しました。盛岡市内を発着点として、今なお復興途上の沿岸部である宮古／田老地区を訪ねるという内容です。行程には景勝地も含まれますが、このツアー最大の目的は現地の語り部さんの話に耳を傾けること。ツアー料金には500円の寄付も含まれ、持続可能な復興支援の取り組みといえます。

ツアーの途中、磯料理店の女将に聞いた1つのエピソードです。「寄付がちゃんと使われとるか分からんから直接見に来たわ !」豪快に笑うその男性は、愛知県から来た客だったそうです。この言葉が、どれだけ彼女や店の人たちの胸に響いたことか…。

3年という時が流れ、当時より更に被災地に足を延ばしにくいと感じる人もいるでしょう。私もその中の一人でした。でも、今こそ出かけてほしい。今しか感じられない光景を目の当たりにしてほしい。岩手の皆さんの強い思いがひしひしと伝わる“手づくり”のバスツアーでした。

スタイルプラス
「名古屋と東北地方を繋ぐ」
（2014年3月2日放送）

情報制作部　服部 篤幸

毎週日曜日正午から生放送の情報番組「スタイルプラス」では、名古屋で東北地方の産直商品を扱うアンテナショップ「みちのく屋」を営む、宮城県仙台市出身の店主に密着しました。この店主は、被災地から直接買い付けた商品を名古屋で販売することで被災地を支援しようと、震災から半年後にオープン。新たな商品を仕入れるため月に一度、岩手県の陸前高田市や大船渡市などの仮設店舗を一軒一軒訪れています。

震災から3年の間に、私は10回近く被災地に取材に行きました。かつて訪れた際、地元の人との会話には不安と期待が入り混じっていた印象でしたが、今回は、前向きな言葉が心に残りました。

「真っ白いキャンバスを与えられたのだから、誰もが羨む町が描ける」

「年月が経って記憶から薄れるのではなく、新たに生きる力が芽生えた」

「いつまでも支援に頼らず、自ら情報発信していきたい」

東北地方に生きる人たちが、商品の復活や開発に立ち上がる一方、私たちが普段の暮らしの中で、東北地方の品物を消費する。こうしたサイクルがいつしか、これからの長期的な支援に繋がっていくのだと思います。

これからも番組を通じ、その時の様子や新たな支援の形を伝えていければと思います。

ニュースを通じ被災地を支援

報道部

「スーパーニュース」「スピーク」「ニュースJAPAN」では、東北地方の物産展や観光紹介、被災地の方々と東海地方との交流、それに福島第一原発の現状などさまざまな東北関連のニュースを放送しました。その本数は2013年7月から2014年6月までの1年で58本です。

【主なニュース項目】

2013年

- 名古屋の中学生が今年も陸前高田を訪問（7月17日）
- 岩手の食材を使おう 名古屋で商談会（8月27日）
- 岩手の観光PR（9月1日）
- 企画 福島県南相馬市 被災地に咲いた花（10月4日）
- 特報 災害救助犬を目指す福島の犬 “じゃがいも” 3度目の挑戦（11月19日）
- 被災地の子どもたちとサンタが交流（12月14日）

2014年

- 陸前高田の中学生が東山動物園で職業体験（1月8日）
- 震災で消えた小さな命展（2月6日）
- 震災企画 岩手・釜石から中継 被災地はいま…(3月11日)
- 大谷主義　被災地の記録映画「遺言」（4月25日）
- 福島第一原発に東海テレビのカメラが取材（5月8日）
- 東日本大震災を考える フレンドシップ防災デー（6月15日）

昨年に引き続き東北物産をPR

わんだほ感謝祭
「つながる！ 東北物産マルシェ」
（2013年10月26日～27日）

営業推進部　澤井　一

東海テレビが視聴者の皆さんに感謝の気持ちを伝えるため、全社を挙げて取り組む屋外イベント「わんだほ感謝祭」。開局55周年を迎えた昨年は、2日間で16万人を超える多くのお客様に来場いただきました。一昨年に続き、少しでも被災地の皆さんの力になろうと、「つながる！ 東北物産マルシェ」と銘打ち、物産販売のスペースを設けました。会場では昨年同様、太平洋側の東北三県（岩手・宮城・福島）から東海地方の皆さんへ、特産品の販売や観光PRをしていただきました。

岩手県のブースでは、朝の連ドラで一躍話題になった“まめぶ汁”をはじめ、“南部煎餅”や“ゆべし”といった名産品が飛ぶように売れていました。また、宮城・福島の両県にも人気商品をそろえていただき、常にお客様が商品を手に取る様子がみられました。

出店いただいたそれぞれのブースでは各県の販売担当者の皆さんから、「前回もそうだったが、いつもすごいですね」「人出が違う」と喜んでいただいたばかりか、来場者からも「がんばって！」という応援メッセージが多く聞かれました。出展する側と商品を買って下さるお客様、東北と名古屋が笑顔でつながった素敵な2日間となりました。

地域に根差した取り組み

5

東海テレビでは、地元密着の番組を新たに3本立ち上げました。
また、「南海トラフ巨大地震」を想定した特別番組、さらには東海テレビ制作の「ドキュメンタリー映画」など、「地域最良のテレビ局」をめざす活動を続けています。

皆さんとともに１年がたちました
スイッチ！

情報制作部　田中 健一郎

「ぴーかん問題」を教訓に、「番組で失った信頼は番組で取り戻す」という強い決意で、昨年春に立ち上げた情報番組「スイッチ！」のスタートから1年余りがたちました。
番組開始当初から私たちが常に念頭に置いているのは、「安全・安心」という見地において、「間違った情報を流さない」「視聴者に不快な思いをさせない」という2点でした。
そのために、企画内容から取材手法、さらにはナレーションやテロップの正確性と細かな表現、映像の適切性などにいたるまで、スタッフがそれぞれの立場において常に意識しながら制作にあたり、最終的にはアシスタントプロデューサー、プロデューサー、チーフプロデューサーがチェックしています。
一方でこの１年、地域の人たちと密につながるために、メール等で寄せられた視聴者の声を番組に色濃く反映するよう努力してきました。
またさまざまなコーナーでさまざまな地域に出向き、“決して派手ではないかも知れないけれど、そこにある小さな魅力でもしっかりと拾い上げて伝える”ということを強く意識してやってきました。
さらには視聴者との距離を縮めるために、スタジオを飛び出し、番組全体を中継で伝えるという試みもしました。
まさに「地域とともに」。
今後も親しみを持ってもらえる番組を目指します。

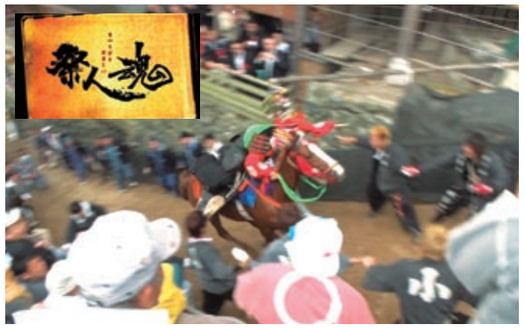
４色のボタンを選んで問題にチャレンジ！
視聴者参加型生クイズ お茶の間アンサー！

制作部　渡辺 克彦

「お茶の間アンサー！」は、視聴者参加型の生放送クイズ番組です。今年4月から金曜夜7時のレギュラー番組として放送を開始しました。
視聴者の皆様はテレビの前から、リモコンのdボタン・スマホ・携帯・パソコンでクイズに参加でき、番組独自で開発した集計システムによって登録人数・参加者の正解数や順位・ゲストとの対戦成績が分かるようにしました。クイズはすべて4択で、大人から子供まで、誰もが楽しんでいただけるようにしています。
今までにない放送形式なので、オンエア業務に携わるスタッフが詰める部屋は毎回戦場のよう…。システムトラブルがなく安全に放送できるよう、制作部、制作技術部、美術部、クロスメディア開発部などのスタッフは、オンエアギリギリまでチェックに余念がありません。
家族のコミュニケーションが薄れてきた今の時代だからこそ、この「お茶の間アンサー!」が、家族揃って見て楽しんでいただける番組になればと思っています。

伝統の祭を受け継ぐ心意気を描く
祭人魂

制作部　伊藤 雅章



古くから伝わる「祭」。その土地の「人々」の息吹が感じられ、「魂」が脈々と受け継がれていく――
今年4月から始まった新番組「祭人魂」では、伝統ある祭に情熱を燃やす「祭人」にスポットを当て、地元に息づく祭りの魅力をお伝えしています。
先日、三重県桑名市多度町の「上げ馬神事」で、人馬一体で2メートルあまりの絶壁を駆け上がる青年騎手に選ばれたY君に密着しました。
祭人・Y君は、地元の高校1年生で、お父さんとの二人暮らし。お父さんもかつて、上げ馬神事の騎手に憧れるも夢は叶わず、その思いは息子のY君に託されます。およそ1か月の訓練の間、地元の先輩たちの厳しい指導に、懸命に歯を食いしばるY君。そして迎えた、神事の当日。「父親に恩返しをしたい」と、絶壁に挑むも……。悔しさに涙ぐむ息子を「誇りに思う」と抱き寄せる父。その様子を温かく見守る地元の人々。取材をする私たちも、胸が熱くなりました。
番組ではこれからもさまざまな「祭人」を紹介し、“家族・親子の絆”、“地元とのつながり”を伝えていきたいと思います。

「まーかん!」コテコテのご当地ヒーロー誕生
黄金鯱伝説グランスピアー

（2013年10～12月、2014年4～6月放送）

制作部　佐野 雅彦

ご当地アイドルやご当地キャラ、さらにご当地グルメなど、いわゆる「ご当地モノ」が注目されています。
制作部では、2013年10～12月と2014年4～6月と二期にわたり「黄金鯱伝説グランスピアー」を制作・放送しました。名古屋城の天守閣の屋根に燦然と輝く金シャチをモチーフに、この地域では初の本格的ご当地ヒーローとして誕生したグランスピアーは、放送開始以来、子供たちをはじめ、お父さんお母さん、そして若い人たちへと人気は拡大し続けています。
キャスティングもご当地にとことんこだわりました。主人公にはこの地方で活躍する男性ユニット・BOYS AND MENの辻本達規さんを起用、そして名古屋が生んだタレントの宮地佑紀生さん、愛知県豊橋市出身のベテラン俳優・松平健さんなど、この地方ゆかりの人たちが脇を固めています。
ロケ地もすべて東海地方。この地方の文化、歴史、言葉、食、習慣などを物語の中に織り交ぜることで、改めて地元の良さを見つめ直してもらえればと思っています。
また、番組のテーマは「愛」。グランスピアーはつねに「愛」の大切さを伝えます。そして「悪」には負けないという主人公の強い心を描くことを通し、子供たちに夢や希望、笑いや感動、ワクワクする気持ちなどを育んでもらえればと思っています。

スーパーニューススペシャル
地震と生きる時代
～子どもたちの命を守れ～

（2014年3月11日放送）

報道部　奥村 信利

「命を守る」。この言葉以外に、防災・減災報道の意義と目的はありません。シンプルで遠大なテーマを前に、テレビは何ができるのか。いつも自問自答を重ねます。東日本大震災から3年が過ぎ、風化が現実になろうとしています。南海トラフ巨大地震をめぐる情報発信も一巡したというのが実感です。

スタッフにも疲れとマンネリが見え始めました。迷った時は、原点に還ること。「自分と大切な人の命を守る」。3回目の「3.11」にもう一度、強い誓いを番組づくりに込めようと思いました。

10メートルを超える津波が懸念される三重県尾鷲市。教え子をひとりも失いたくないと奮闘する女性教諭が、自作の唄を児童たちにプレゼントしました。子どもたちは歌詞から、「自分の力で生き抜く子に育ってほしい」という先生の願いを読み取っていました。

揺れと同時に河川堤防が崩れると、広い範囲で浸水の可能性が指摘されている海抜0メートルの町・愛知県蟹江町。小学1年生たちが4階まで階段を駆け上がる訓練をしていました。自分にできる全力で、一歩でも速く、高く、足を進めようとしていました。

災害に負けない社会を作るために、子どもたちが自ら「生き抜く力」を育てることが欠かせません。生き抜いた子どもたちが、ガレキの上に新しい国を創ります。見ているのは、大人の背中。「ホンネとタテマエ」を敏感に嗅ぎ分ける子どもたちは、大人たちの「本気度」をじっと見つめ、自分の将来の行動を決めようとしています。いまの大人たちは巨大地震への備えに、本気で、全力で、取り組もうとしているでしょうか?

大切な大切な子どもたちの命を守るために、大人が襟を正すこと。番組を通じて伝えたかったメッセージです。日本列島の地下深くでは、次の巨大地震に向けた動きが毎日少しずつ、そして着実に進んでいます。「その日」は間違いなく、やってきます。自分たちが作る番組の一言一句、映像の一片でも視聴してくれた人が、小さな備えを積み重ね、ひとりでも多く、自分と大切な人の命を守れるように。目新しさは無くても、手垢の付いたボロボロの旗を掲げ、画面の向こう側へ問いかけを続けます。

東海テレビの「矜持」　全国そして海外へ
ドキュメンタリー映画の制作

報道局　阿武野 勝彦

2011年2月。ドキュメンタリー映画の公開は、東日本大震災の直前だった。その8月、「ぴーかん」事件…。他社からも作品を集めて特集上映する企画も、CS放送からのドキュメンタリーの買付けも、あっけなく潰れた。セシウムさんの東海テレビ…。あれから映画7作品を公開してきた。思えば、随分嫌な思いをしながらやってきた。とにかく地に落ちた社名を1ミリでも上げるには、何をしたら良いのか？ そして、「テレビの使命」という青臭いような思いから始めたいと思った。

『**約束～名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯～**』（2013年）は、1年以上たっても、山形の映画館に毎日50人前後のお客さんが足を運んでくれたし、自主上映も全国100か所に及んでいる。

『**死刑弁護人**』（2013年）は、香港・台湾へ海を渡った。2つの作品で全体の宣伝費を回収。黒字化が見えた。

『**ホームレス理事長 ～退学球児再生計画～**』（2014年2月公開）は、放送と映画、二つの世界で全く違う反応を呼んだ。問題回避型の今のテレビと、生き生きとした表現のあり方を考え直す機会だった。

最新作『**神宮希林 わたしの神様**』（2014年4月公開）は、エンターテインメントへチャレンジした。赤福の特別協賛で、三重、大阪、福岡ではシネコン上映へと広がった。

「よい映画を繰り出す東海テレビが地域の誇り」。いつの日か、そういわれたい。スタッフ一同、まだまだ額に汗しなくては。

愛知の全市町村の代表が健脚を競う！
愛知駅伝

（2013年12月7日放送）

スポーツ部　五十嵐 悠介

愛知県下54市町村が9区間、小学生・中学生・高校生・一般とさまざまな世代でチームを作り、ふるさとの絆をつなぐ「愛知駅伝」。2006年から愛知県長久手市のモリコロパークを舞台に毎年開催しているこのイベントを、東海テレビでは生中継でお届けしています。8回目となった昨年の大会は、「市の部」では豊橋市が、また「町村の部」では東浦町が優勝しました。

この大会には選手の他、補欠を含めるとおよそ1000人のランナーが大会に関わります。「前回の自分へのリベンジのために」「家族のために」「最後のレースをいい思い出にするために」…そこにはランナー一人ひとりのドラマがあります。番組ではレース展開と共に、タスキにこめられた多くのドラマを取り上げ、ランナーの想いを伝えるようにしています。

これからも駅伝を通して、地域に暮らす皆様の「絆」や「想い」を大事にし、発信し続けていきます。

大学院生を対象にメディアの現場を伝える
名古屋大学講座「民間放送論」

総務部

2006年から名古屋大学大学院国際言語文化研究科のメディアプロフェッショナルコースにおいて、「民間放送論」と題して同大学院の院生を対象に、東海テレビの役員・従業員が講義を行ってきました。

今年度も4月から7月までの予定で週1回、計15回にわたって当社の報道、制作、技術、営業、考査等の各部門の部長クラスが講義を行っています。

海外からの留学生も多いため、内容は日本の放送界を規律する放送法、電波法の成立背景、改正の歴史などに始まり、各部門の業務内容や当社の「ぴーかん問題」も含めた放送倫理向上への取り組み、大規模災害への対応などそれぞれの課題を示し、各部署がどのような目的を持って、どのような仕事を遂行しているのかを講義しています。また、民放と放送スポンサーとの関係、キー局との関係についても触れ、ローカル局に求められる役割は何か、激変する環境にどのように対応し、視聴者と共にどのような歩みを進めるのかを共に考えています。

開局55周年に関する取り組み

6

1958年(昭和33年)に放送を開始した東海テレビは2013年、開局55年を迎えました。
ここでは開局55周年に関する主な取り組みについてご報告します。

“遷御の夜に生放送”した理由
真夜中のお伊勢さん ～遷御の夜に生放送～
(2013年10月2日放送)

報道部　伏原 健之

「テレビは生じゃなきゃ」という思いがいつも私の中にある。『東海テレビ開局55周年記念　真夜中のお伊勢さん～遷御の夜に生放送～』という少々仰々しいタイトルの番組は、20年に一度の伊勢神宮の一大神事をできるだけ生々しいかたちで放送しようと試みた番組。当初は遷御の儀が終わった週末にVTR番組を放送するというプランもあったが、「やっぱ生でしょ」となった。屋外での“全中継”は経費だけでなく、大量のスタッフが必要となる。しかし、そんな余剰人員はわが社にはいなかった。演出は東海テレビプロダクション、技術は東通、制作進行やデスクは東海テレビという混成チームを組んだ。とはいえ、東プロも東通もさまざまな番組を一緒に作ってきた仲間。自社スタッフ以上に“勝手知ったる”メンバーばかりでチームワークは抜群だった。ニュースだけでなく、長年、外部スタッフとともに生の情報番組を続けてきたノウハウは、この番組でも十分生かされたと思う。

20年に一度の番組は、格調の高さとともに、テレビとして“今”を演出することも大切だと思った。20年後、誰かがこの番組を見た際、「あの頃はこういう時代だったんだ」と感じてもらえることを想像した。そこで今回は堅苦しくならないように“今どき”の情報バラエティの要素も取り入れた。出演者は専門家だけでなく、樹木希林さんと茂木健一郎さん、さらにお笑い芸人を交えて親しみやすさを演出。模型やフリップを駆使して式年遷宮を丁寧に説明した。親しみやすく、分かりやすく…色々な考え方があるが、少なくとも今は、それがテレビに求められている時代だと思う。

番組の司会は60歳を迎えた高井一アナウンサー。40年前の遷宮年に入社し、20年前の特番でも司会を務めている。今回は、高井アナと同じ大学の後輩で35歳の福島智之アナウンサーをリポーターに起用した。「技術の伝承」もできたと思っている。20年後が楽しみだ。

ハンディを乗り越え深まる親子の絆
ハンドベル卒業式
(2014年3月16日放送)

東京制作部　猪飼 健夫

開局55周年記念番組として放送した「ハンドベル卒業式」は、聴覚障害がある娘とその母親の深い絆を描いたドラマです。舞台は口話教育を実践するろう学校。高島礼子さんが演じる元歌手・あずさの娘・美音にはわずかな聴力があるものの、人とのやり取りはいつも手話に頼るばかりで、なかなか話しをしようとしません。何とか声を出して話して欲しいと願うあずさは娘の姿にやきもきします。そんなある日、期限付きで赴任した新米音楽教師・佐竹が教室に持ってきたのがハンドベル。美しい音色にすっかり魅了された美音は、クラスメートと共に練習に励むようになります。ところがあずさは、音楽にうつつをぬかし口話の訓練をしない美音のことが気になります。「子どもが声を出さなくなったのは自分の責任」と思い悩む母親と、「自分が声を出すことをお母さんは嫌がっている」「声を出すとお母さんに責任を感じさせ、苦しめてしまう」と思い込んでいた娘。互いに感情をぶつけあうことで二人に生じていた誤解が解けていきます。そして迎えた卒業式、美音は勇気をふるい、ついに自分の声であずさに感謝の気持ちを伝えます。このあと、美音をはじめ卒業生によるハンドベルの演奏と共に物語は心温まるフィナーレを迎えます。

今回、主題歌には名古屋出身のアーティスト、藤田麻衣子さんの「つぼみ」を使用しました。あずさから美音への気持ちが歌詞の中に表現されていたためです。高島礼子さんもレコーディングされているときに「素敵なフレーズですね。娘に向かって語るように歌えば良いですよね」と、ご本人が苦手とおっしゃっている歌でしたが、素晴らしい歌声を披露していただきました。

名古屋の夏を 金魚が雅に彩る
アートアクアリウム展
(2013年8月9日～10月1日)

事業部　鈴木　衛

2013年8月9日から10月1日まで54日間に渡り、「アートアクアリウム展」を開催しました。テレピアホールで無定量、展覧会形式のイベントは初めての挑戦でした。金魚が主役のこの展覧会は、最終的に約30万人を動員し、成功裡に終了しました。その後「アートアクアリウム」の勢いは益々盛んになり名古屋以降札幌、大阪、博多と回り、どの会場でも大量動員しています。ひと言で言ってしまうと金魚の展覧会であるこの企画は、どの様にできたのでしょうか。

今回の目玉である花魁(おいらん)は、1000匹の金魚が泳ぐ世界最大級の金魚鉢です。元々狭い一つの水槽に1000匹もの魚が泳ぐためには水が浄化されていないと成り立ちません。企画元のHIDは熱帯魚店を経営しており、魚の生態管理に精通していました。その上であの押し出しの強いフォルムを持った水槽を作ったのです。さらに金魚が泳ぐと鱗が反射し幻想的に輝く演出をほどこしました。ヒット企画が、あたり前の金魚を演出することにより生まれた事、そしてこの演出には誰もが持ち合わせていない技術的な裏付けがあった事は、今後の参考になると思いました。

最後に、この「アートアクアリウム展」を名古屋で開催することができ、多くの方に足を運んでいただけたことに改めて感謝しています。

開局55周年　主な取り組み

〈周年番組〉

- そんなこんなで女は走る
  （2013年3月17日放送）
- 真夜中のお伊勢さん ～遷御の夜に生放送～
  （2013年10月2日放送）
- わんだほ感謝祭スイッチSP ～みんなつながる～
  （2013年10月26日放送）
- 神宮希林
  （2013年11月3日放送）
- ハンドベル卒業式
  （2014年3月16日放送）
- 4分9秒の奇跡 浅田真央11年密着
  （2014年3月17日放送）

〈周年イベント〉

- スーパークラシックコンサート
  （2013年4月22日－2014年1月5日　計4公演）
- シルク・ドゥ・ソレイユ「マイケル・ジャクソン ザ・ イモータル ワールドツアー」
  （2013年5月23日－26日）
- ナゴヤオクトーバーフェスト2013
  （2013年7月5日－21日）
- アートアクアリウム展
  （2013年8月9日－10月1日）
- わんだほ感謝祭2013
  （2013年10月26日－27日）
- 大名古屋らくご祭2013
  （2013年12月20日－23日）
- 劇団四季「美女と野獣」
  （2014年1月12日－）

環境に対する取り組み

7

東海テレビ環境方針

2014年4月1日
東海テレビ放送株式会社

東海テレビは、地球温暖化による世界的な環境変化を深刻な事態として認識し、企業の社会的責任として放送・事業活動のすべてにわたり、環境に与える負荷の低減をはかるよう全社をあげて行動します。
また、メディア企業としての特長を生かし、地球環境の保全に役立つ情報をあらゆる放送・事業活動を通じて積極的に発信します。

1. 東海テレビは、環境関連法令、規則を遵守するとともに、自主的に定めた環境行動目標の達成に向けて、省エネルギーや廃棄物の削減などについて継続して取り組みます。
2. 東海テレビは、この環境方針を従業員一人ひとりに周知徹底させ、環境保護に対する自覚と責任を持って行動できる人材を育成します。
3. 東海テレビは、テレビ番組や各種イベントを通じて地球環境の保護について発信します。
4. 発信された環境保護の情報や環境保護活動は、当社のホームページなどを通じて公開します。

環境行動目標

エネルギー消費の現状

東海テレビでは、2011年7月の地上デジタル放送の完全移行までの間、アナログ・デジタルのサイマル放送継続による放送設備の重複などに起因したエネルギー使用量の増加が必至と予測していましたが、省電力機器の導入や事務部門における省エネ努力など、全部門でエネルギー消費抑制を徹底した結果、二酸化炭素排出量の削減目標（2004年度比25%削減）を達成しました。
しかしながら、本社スタジオを使用する自社制作番組の割合も増えていることや放送形態の多様化、高度化などにより、電気消費量は今後増加することが予想されるため、引き続き、エネルギー消費抑制策の強化、促進に努めてまいります。

取り組み

- 放送設備、機材に省エネ仕様製品の導入を促進します。
- 日常業務における節電、節水、ゴミ分別回収の徹底や紙などの資源使用量の節約等によるエネルギー消費抑制を徹底します。
- 放送用VTRテープの再利用など番組制作における省資源への取り組みを強化します。
- 番組、事業活動などによる啓発活動を推進します。

※その他、環境保護活動について定期的に検討してゆきます。

数値目標

2020年度の二酸化炭素排出量の絶対量を2010年度比で15%削減することを目指します。

第三者意見 Ⅱ

「オンブズ東海」の委員を務める弁護士の橋本修三氏にご意見をいただきました。

橋本 修三氏

名古屋市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、1987年弁護士登録（愛知県弁護士会）。1992年橋本法律事務所を開設し、現在に至る。

私は、2012年1月に設置された「オンブズ東海」の委員に就任し、本年6月までに10回の委員会に出席するとともにさまざまな意見を述べさせていただいた。昨年8月には、「再生委員会」の活動が終了し、オンブズ東海がそのチェック機能を代わって担うこととなった。そして、オンブズ東海では、その後新たに発足した「コンプライアンス責任者会議」からの日々生起する問題点、議論の経過等の報告を受けてきた。責任者会議では、単なる形式的な議論にとどまらず、さまざまな問題点について幅広く検討されており、東海テレビの健全性を感じ取ることができる。また、本年3月に開催された放送人研修会にも同席したが、多数の関係者が参加し、講師に対して熱心に質問をしていた。

テレビに携わる制作スタッフは、毎日の仕事に追われていると聞く。「局と制作会社とフリーのスタッフ、互いの関心も力量もわからないまま、むやみと忙しくはたらいているが、意思の疎通は不足し、チームとしての一体感も生まれにくい。これでは次代の放送界を担う若い制作者たちに、放送に必要な基本的技能や心構えは伝わらないし、わずかなミスや行為が重大な結果を引き起こすことになってしまう」これは、不適切テロップ問題に関してBPOの放送倫理検証委員会が出した提言の一節であるが、局の内外を問わずテレビ制作に関わるスタッフは、この指摘を充分に噛みしめ、心に刻んでいく必要がある。

不適切テロップ問題から3年目を迎え、その後に入社したスタッフも増えつつあるが、この問題を風化させてはならない。現状が改善されないままBPOから同じような厳しい指摘が繰り返されている他局もある。オンブズ東海にこれまでなされた報告や社内視察等を踏まえると、幸い東海テレビにおいては、再生に向けて取り組む体制は着実に進んでいると感じられる。ただ、日々の仕事に忙殺され、ややもすると一歩立ち止まって振り返る余裕もなくなってしまいがちである。すべてのスタッフが情報を共有するという風通しの良さを維持するとともに、職場におけるコミュニケーションが不足しないようにすることが大事だ。そして、万一にも、何らかの問題があると感じた場合には、放送人としての倫理観に基づいて疑問を持つ姿勢、声を上げる勇気を失ってはならないと思う。これまでにも増して視聴者に愛され、信頼されるテレビ局を目指すことを大いに期待したい。

おわりに

本冊子を最後までご覧いただき、まことにありがとうございました。

信頼を築く取り組みは、積み木を積み上げる作業に例えられます。一つひとつ積み上げていくには、丁寧さと根気と時間が必要です。しかし、少しでも手を抜いたり、わずかな気の緩みがあったりすると、積み木はあっという間に崩れてしまいます。東海テレビは今まさに積み木を積み直す作業を続けています。過去の出来事を振り返り、従業員一人ひとりが当事者意識を持つこと、そして、新しい世代にもぴーかん問題を伝え続けることが、与えられた責任です。手を抜くことなく、気を引き締め、「信頼の積み木」を積み重ねてまいります。

コンプライアンス宣言

東海テレビ放送は、放送事業の高い公共性や社会的使命を常に自覚しながら、
企業倫理を守り地域社会に貢献することを目指します。
役員および従業員は地域の皆様からの厚い信頼と支持を得るため、
諸法令や社会規範を遵守するコンプライアンス経営を推進します。

コンプライアンス行動基準（抜粋）

私たち役員および従業員は、放送活動をはじめ企業活動を行う上で、
すべての法令を誠実に遵守するとともに、社会良識をもって次のとおり行動します。

1. 放送メディアとしての責任を自覚し、高い倫理観を持って法令や社会規範を厳格に遵守します
2. 企業活動を通じて文化の発展、福祉の向上、環境保全などの社会貢献に努めます
3. 言論と表現の自由を守り、公正かつ中立な報道をするとともに、社会生活に役立つ番組やイベントなどを提供します
4. 社会良識に基づいた適正な取引きを行い、健全な企業活動を推進します
5. 経営の透明性を確保するため、当社が保有する情報は適正に管理し、企業情報を社内外に公正に開示します
6. 従業員の個性、人格を尊重し、その能力、活力が十分発揮できるよう安全で明るい職場環境づくりを行います

◎お問い合わせ先
東海テレビ放送株式会社 コンプライアンス推進部
〒461-8501　愛知県名古屋市東区東桜一丁目14番27号
Tel. 052-951-2511（代表）　ホームページ　http://tokai-tv.com/

発行年月　2014年8月　※文中の所属・肩書については原稿作成時点のものとなっています。